

バングラデシュからの手紙 2003 年

ブラザー・フランクからのメッセージ

友人のみなさんへ

ブラザー・フランクより
マイメンシン(バングラデシュ)にて
2003 年 6 月 聖霊降臨(ペンテコステ)の日に

3月にイラクでの戦争が始まったとき、ここバングラデシュでは、四つの「信頼の巡礼」の一つ目が、チッタゴン(バングラデシュ南部の港湾都市)近くのディアンでちょうど始まりました。この二つの出来事が重なったのは偶然でしたが、共に過ごしているうちに、この「信頼の巡礼」そのものが、わたしたちの心をつなげた平和への強い願いであることに気づきました。

今回の巡礼は、チッタゴンにおける最初の障害者との「信頼の巡礼」でした。大きく分けて三つのグループの人々が集まりました。まずは、チッタゴン丘陵から集まったクリスチャンと何人かの仏教徒。この人々は、チャクマおよびトゥリプラという先住民族で、少数派として過去多くの苦悩を体験し、現在も多数派であるベンガル人の威力が増大する中で将来に不安を抱いている人々です。二つ目のグループは、ベンガル人のクリスチャン。彼らは数百年前にクリスチャンになった人々の子孫で、ポルトガルの名字を持っています。三つ目のグループは、このマイメンシンからわたしたちと行った人々で、イスラム教徒と少数民族ガロのクリスチャンから成っていました。

わたしたちは、互いに助け合いながら、みんな一緒にこの巡礼へと歩み出しました。あるグループの盲人は、別のグループの人に付き添われました。奉納の行列では、クリスチャンの子どもがイスラム教の青年によって祭壇へと進みました。それまで外に出かけることのなかったトゥリプラの盲人女性が語った、ビルマ国境近くの自分の村の悲しい物語は、みんなの心に触れました。「十字架の道行き」では、重度障害の子どもが父親が、日本からの女性に支えられて、その子を腕に抱きながら十字架を担ぎました。

わたしたちは、みんな担い合いながら過ごしたので

す。自分が他の人より優れていることを証明する必要をだれも感じませんでした。お互いが必要でした。平和と大きな喜びがそこにはありました。ありのままを互いに歓迎し合ったのです。壁が崩れ落ち、互いに助けが必要な者となったとき、神さまがわたしたちの内に住まわれました。

この巡礼の一週間後、イスラム教徒、クリスチャン、ヒンズー教徒の青年グループが、また別の巡礼に---今回は、バングラデシュの北西にあるディナジプールに---このマイメンシンから出発しました。大きな教会がわたしたちを迎え入れ、その広大な地方から約500人の人々が集まりました。貸しきりバスで、あるいは満杯の路線バスに何時間も揺られながら、また近くの村々からはリキシャに乗って、人々は集まりました。周辺の村々には車椅子がほとんどないので、わたしたちはマイメンシンから車椅子をバスの屋根に積んで運びました。これらの車椅子によって、身体の不自由な人々は、宿泊、食事、祈り、集いの会場を楽に行き来することができました。

この地での障害者との巡礼は3回目でした。3回目の参加者もいれば今回初めての人もありました。少数民族サンタルの女性で両足と片手のない人が、息子に連れられて参加しました。それまでの2回の巡礼では、息子一人だけが巡礼に参加したのです。今回は、母親を連れてきた後、彼は家に戻り病気の父親のそばに留まりました。他の多くの人々が自分の母親の面倒を見てくれることを彼は知っていたのです。この母親は、他の人々に完全に頼らねばならない障害を持ちながらも、人々を勇気付け、人々の悲しみに耳を傾け、「十字架の道行き」では、手押し車に乗りながら十字架を抱えました。

それまでの巡礼同様、互いの物語を分かち合う時間は短すぎるほどでした。青年たち・大人たちが話しに聴き入りました。子供たちには別のプログラムが用意されていました。障害者がこれほどたくさん集まっているのを見るだけでも、心揺さぶられるのでした。最初は、恥ずかしさやひとりひとりの限界が恐れを感じさせました。分かち合うことの恐れ、自分の傷を認め

ることの恐れ、手を差し出すことへの恐れ。しかし、ひとりひとりの心は叫んでいたのです。傷ついた身体がありました。しかし同時に多くの傷ついた心があったのです……身体の健常な人にも……。しかし、わたしたちと一緒にマイメンシンから車椅子で参加したヒンズー教徒の青年バツピが、いかに自分の人生が変わったか、いかに「一人では何もできない」ことを受容したかをみんなに話したとき、それは多くの人々の心を開きました。マザーテレサの修道会のシスターと一緒にラジシャヒから参加した若いイスラム教徒アザドゥが、遠く離れ孤立した村々から来た多くの参加者のために何もすることのできない苦悩を分かちあったとき、そしてそれを聴いて涙し彼への励ましの声をあげる参加者を見たとき、わたしたちは、今回も、「慈しみと愛のうちに耳を傾けること」が癒しの始まりであること、この癒しこそこの巡礼の祈りと交わり（コミュニオン）の中でみんなが探し求めているものであることを知らされました。

この巡礼の後、さらに別の障害者との巡礼へわたしたちは出発しました。今回の会場は、2001年、2002年にもすでに巡礼を開催したバロマリでした。ディナジプールと同様、この地域の多くの青年たちがこの巡礼を手伝い、また自分自身もそれに参加するために集まりました。「弱い人々に仕えることがどんなに靈的また人間的な成長を助けてくれるか」、このことを前回までの巡礼で参加者は体験し、それを周りの人々に伝えてきました。人々は、巡礼に参加した友人たちから、「弱さ」が友情と分かち合いを可能にしてゆくことを知らされました。このように、多くの若者たちが、勉強の時間を犠牲にしなが、何時間も自転車をこぎ、村々を周り、「弱さ」が平和……本当の、真実の平和……への道であるかを伝えてきたのです。

バロマリは、インドとの国境近くの丘に位置しています。「十字架の道行き」は丘の中で行われました。一つの車椅子を移動するのに5人の力が必要でした。松葉杖の人にも助けが必要です。ほとんど目が見えない少年ジュダは、腫瘍によって顔がただれているウィルソンに助けられながら、十字架を担いで歩きました。（現在わたしたちはジュダをこのマイメンシンに治療のために迎え入れています。おそらく片方の目は何とか見えるようになるかと期待しています。）そうです、わたしたちみんなが互いを必要としているのです。そ

して、夜、復活のキリストへの歌を歌い（このときはまだ復活日以前でしたが）、少数民族ガロの踊りをみんなで踊りました。車椅子の参加者たちも踊りました。踊りと歌の後で、大きな十字架の近くにひとりひとりがロウソクを置き、その後夕食を共にしました。そのとき、巡礼者によって置かれた200のロウソクの光を浴びる十字架が遠くから見ええました。この景色がこの巡礼を象徴しています。……痛み、苦悩は消えていない、しかし復活のキリストの光はそれを貫き、包んでいる……。

バングラデシュの最も北部に位置するこのバロマリを後にして、一週間後、わたしたちは今度は首都ダッカ近くのクリスチャンの村ナゴリでの巡礼に向いました。障害者たちが、この昔からの熱心なクリスチャンの村に宿泊することはかつてありませんでした。この巡礼には約300人が集いました。たくさんの青年たちが手伝うために集まってくれました。十分過ぎるほどに！

復活祭が近づいていました。しかしイラクでの戦争は続いていました。今年バングラデシュで開催された障害者との四つの「信頼の巡礼」の最後のものでした。これらの巡礼は一つの祈りになりました。それは、平和への祈り。わたしたちは一緒に旗を作り、そこには「アマル・シャンティ・チャイ」（わたしたちは平和を願う）と書かれていました。それを掲げながら沈黙のうちに、巡礼の最後の祈りの会場へと歩きました。

この世界で起きている多くのことに心が痛みます。しかし、実に多様な人類家族と共に旅することを学び、ひとりひとりの賜物、文化、宗教を迎え入れる中に、わたしたちは信頼の泉を発見します。互いに助けが必要な貧しい者だと気づくとき、新しい霊が与えられるのです。恐れは霊ではありません。神さまへの信頼の霊です。神さまはただ愛。愛するだけの神さま、その神さまが、あなたの弱さを通して、あなたを今人々の中で信頼と平和の担い手となるように招いておられるのです。

ブラザー・フランク